



# 教職大学院 Newsletter No.160

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2022.6.18

## 実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブル 2022 HYBRID (対面-Online) SUMMER SESSIONS 特集号



**実践し省察するコミュニティ**

Round Tables:  
Summer Sessions 2022  
for Reflective Practice  
and Organizational Learning  
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル  
2022 Summer sessions  
18(sat) 10:00-17:40  
19(sun) 8:20-14:00  
福井大学総合研究棟V (教育系1号館) 総合研究棟  
online-offline hybrid sessions with Zoom

探究する学びを実現する教師  
教師を支える教職大学院  
教師の実践力を増やす学校拠点の実践研究

学校と大学/  
実践と研究を結ぶ  
新しい実践研究組織とそのネットワーク

**2022.6.18-19**

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院  
福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科  
編集 福井県教育委員会  
独立行政法人国際協力機構北陸センター  
online-offline hybrid sessions with Zoom

**内容**

福井大学連合教職大学院のラウンドテーブルに寄せて (2)  
全体スケジュール (4)

**Special Session**

教職大学院改革特別フォーラム (5)  
**Zone A** 学校 (6)  
**Zone B** 教師教育 (7)  
**Zone C** コミュニティ (8)  
**Zone D** International (9)  
**Zone E** 探究 (11)

**Round Table Cross Sessions** (12)

実践し省察するコミュニティを結び支える (13)  
ラウンドテーブルの歩み (15)  
福井大学連合教職大学院が実践する教育改革  
グローバルコミュニティへの誘い (17)  
アーカイブ (19)  
教職大学院の学びを振り返って (26)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2022年6月の開催をもって43回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。今回は、ハイブリッド(対面-Online)にてSUMMER SESSIONSを開催いたします。6月18日(土)には、教職大学院改革特別フォーラム、5つのテーマに即したZONE SESSIONS、6月19日(日)には小グループ(5-6名程度)で実践を丁寧に語り聴き合うROUND TABLE CROSS SESSIONSを行います。

この2日間で、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

**【対面-オンライン(Zoom)のハイブリッド・セッションについて】**

参加申込時の登録メールアドレス宛に以下の日程でご連絡差し上げます。

(1) **6月17日(金)**:6月18日(土)申込 ZONE ごとの Zoom URL をお知らせします。

(2) **6月18日(土)**:6月19日(日)ラウンドテーブルの Zoom URL をお知らせします。

\*Zoom URL が未受信の場合には dpdtfukui@yahoo.co.jp 宛に所属・氏名を添えてご連絡ください。

\*両日ともに Zoom ブレイクアウトルームの設定がございますので、できるだけ「Zoom 接続開始」時間までに Zoom ミーティングに入室してください。運営サポートにご協力をお願いします。



## ようこそ 福井ラウンドテーブルへ Welcome to Fukui Round Table

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

教授 木村 優

ようこそ 福井ラウンドテーブルへ。このたびはオンサイト・オンラインどちらも、初めての方・常連の方どちらも、福井ラウンドテーブルにご参会いただき誠にありがとうございます。福井大学大学院連合教職開発研究科スタッフ一同、あなたのご参会を心よりお待ちしております！

教育にかかわる実践者が学び合う場として生まれた福井ラウンドテーブルは、この 20 年余りをかけて日本各地に、さらに国境を越えて世界各地に伝播しています。こうしたグローバルでダイナミックな展開の中で、ラウンドテーブルは各地で実践者の学び合いを越えて、子どもたち・若者たち・大人たちが出会い、関係の糸を紡ぎ、それぞれの学びや探究のプロセスを持ち合い、膝をつき合わせて、肩を寄せ合って、学び合い、育ち合う場へと進化していています。

こうしてラウンドテーブルが各地で生まれ育つ中で、福井ラウンドテーブルもまたラウンドテーブルの「メッカ」として進化を続けています。このラウンドテーブルの魅力をあなたと分かち合いたく、この場（スペース）を借りて、福井ラウンドテーブルの構成とその意味を改めて紹介させていただきます。

毎回の福井ラウンドテーブルでは、DAY 1 午前に特別フォーラムが開かれます。これは、福井大学大学院連合教職開発研究科のミッションにもとづく、日本全国・世界各地の教師教育・教員養成のステークホルダーとのコラボレーションを推進するセッションになっています。2022 年はポスト教員免許状更新講習や教員養成フラッグシップ大学構想などなど、教育改革目白押し的一年ですので、この特別フォーラムが重要な投錨点になることでしょう。

なおこの DAY 1 午前、過去には東アジアや欧米の研究者を招聘して国際フォーラムも開かれています。2015 年 2 月には、世界で 5本の指に入るスーパー教育学者アンディ・ハーグリーブス教授を招聘し、DAY 1 午前に国際フォーラムを企画開催させていただきました。あの時は、教授の著書の翻訳本『知識社会の学校と教師』（金子書房、2015）の発刊記念をあわせての招聘でした。そして 2022 年には続編の翻訳本、アンディ・ハーグリーブス & マイケル・フラン『専門職としての教師の資本』（金子書房、2022）が発刊されています（\*1）。ということは、もしかして、今年 2022 年に、何かあるかもしれません！ ぜひ本を手に入れて乞うご期待ください。

さて話を戻しましょう。DAY 1 午後には、5つのテーマに分かれた ZONE ごとの対話が行われます。A:学校、B:教師教育、C:コミュニティ、D:国際、E:探究、それぞれの ZONE でこれまで進めてきた対話と発見にもとづいて

ザインされた (1)ポスターセッション、(2)シンポジウム、(3)フォーラム・ワークショップが行われます。どの ZONE のどのセッションでも対話が重視されていますので、ぜひあなたがお考えになったことや気づかれたことを気軽に共有してください。あなたの「声」が、それぞれの ZONE の対話を実り豊かにしてくれるのです。

DAY 2 は、ラウンドテーブル・クロスセッションです。ラウンドテーブルの文字通り！福井ラウンドテーブルです。ここで「ハッ！」とした方、「なんだって!？」と驚いた方がおられるかもしれません。そう、ラウンドテーブル・クロスセッションこそがまさに福井ラウンドテーブルのメインセッションであり、醍醐味なのです。この DAY 2 ラウンドテーブル・クロスセッションに参加しないということは何のような意味を持つのか、それはまるで、念願の高級レストランを予約して、いざ念願のコース料理を頼んだのに、メインディッシュが来る前になぜかテーブルをあとにしてしまう、このような不可思議なことと同じようなものです。

実を言うと、DAY 1 の ZONE ごとのセッションは、福井ラウンドテーブルの「入口」にすぎません(こう「すぎません」と言うと少し語弊があるかもしれないのですが本当の話です。先ほどの高級レストランのコース料理の喩えで言えば、前菜、アンティパストが ZONE セッションなのです)。なぜなら ZONE は見ての通りテーマ別のセッションですので、私たちの関心と対話はどうしてもテーマの中で均質になってしまうのです。もちろん、同じ関心や似た立場の人が集まるので、テーマに関する深い対話はできるのですが、発想の拡がりに欠けてしまいますし、何より多様性が少ないので対話が生み出す想像・創造も膨らみにくいものです。

一方、ラウンドテーブル・クロスセッションでは、それぞれ異なる関心、立場、仕事、世代年齢の人々6人ほどがテーブルで一堂に会します。そこでは、あなたが見たこともない、聴いたこともない実践、いや、もしかしたら、誰もが体験したことのない超最新・最前線の実践を目の当たりにし耳にすることができます。そして、偶然に(これも実は偶然ではなく、福井ラウンドテーブル実行委員会スタッフが1ヶ月以上前から準備し、DAY 1 終了後に練りに練って仕上げた)テーブルをともにしたメンバーが互いを知り合い、関係を築くことで新しいノット(結び目)が生まれ、新しい学びや探究や実践や研究が繋がっていくのです(ノットワーキングそしてネットワークワーキング)。

もしも DAY 1 だけの参会を予定していた方は、今からでも遅くはありません。ぜひぜひ予定を調整して、DAY 2 にもご参会ください。それでも、どうしても DAY 2 に出られない方もご安心ください。福井ラウンドテーブルは年間2回、6月と2月に開かれます。ぜひ次回の福井ラウンドテーブルでは DAY 2 にご参会ください。いつでも私たちは Welcome です。

それでは、Please enjoy Fukui Round Table! きっとあなたは今回の福井ラウンドテーブルでいろいろな気づき、発見をすることになるでしょう。そして、多くの新しい仲間に出会い、新しい関係の結び目を見つけ、その結び目を紡いで、新しい世界を新しい仲間と共創していくことになるでしょう。その共創の仲間に、私たちスタッフも入れてくださると、嬉しく幸せな限りです。

We're looking forward to seeing you soon!

(\*1)本書籍の案内は、巻末(p.33)に掲載しております。

# 実践研究

## 福井ラウンドテーブル

### 2022 Summer sessions

6/18(sat) 10:00-17:40 (zoom 接続開始 9:30)

Session I 教職大学院改革特別フォーラム 10:00-12:00

**「新たな教師の学び」を支える協働のために  
更新制講習以後の研修改革の展望をどう描くか**

Session II 学校・教育・地域を考える 5つのアプローチ Zone Sessions 13:00-17:40

ポスターセッション Poster Session 13:00-14:00, **各 zone の開始は 14:30 から**

- A 学校:21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う  
ー多様な子どもたちの学びと育ちを支えるコミュニティを培うー
- B 教師教育:働き方改革と学び合う学校づくり  
ー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティをコーディネートする  
ーつどい、つながり、新しい価値をつむぐー
- D International: International Initiatives on Collaborative Learning
- E 探究:学(まな)びと教(おし)えのあたらしいすがたカタチをみんなでかんがえよう  
ー学校新設(がっこうしんせつ)!? プロジェクトをはじめよう PART2ー

18:00-18:30 省察的実践学会総会

6/19(sun) 8:20-14:00 (zoom 接続開始 7:50)

Session III Round Table Cross Sessions

**実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る**

7:50- 8:20	接続
8:20- 8:40	オリエンテーション
8:40- 9:00	自己紹介&アイスブレイク
9:00-10:40	報告 I
10:40-11:40	報告 II ～ランチ・ブレイク～
12:20-14:00	報告 III

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

**小グループで実践の展開を聴き合います。**

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。

言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。

話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため8:20-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として8:20-14:00の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしく願いいたします。

6/18 (sat) 10:00-12:00 (zoom 接続開始 9:30)

## 教職大学院改革特別フォーラム

## 「新たな教師の学び」を支える協働のために

## 教員養成フラグシップ大学構想と養成・研修改革の展望

中央教育審議会「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会「審議まとめ」(2021.11.15)の提起を受けて行われた2022年2月のラウンドテーブル特別フォーラムでは、教育改革を担う教師の学びの在り方、教師自身の「主体的・対話的で深い学び」を実現していくことの必要性と重要性をめぐる提起を受け、地域と大学における新たな教師の学びへの企図が共有された。具体的には、文部科学省総合教育政策局 教育人材政策課 教員養成企画室長の小畑康生氏による情勢報告と、独立行政法人 教職員支援機構 理事長の荒瀬克己氏による方向定位を受け、福井大学(松木健一)、福井県総合教育研究所(北川裕之氏)、山口大学(和泉研二氏)、宮古島市(平良善信氏)より、地域と大学を結び教師の学びを支える取り組みの展開が提起された。

今回のセッションでは、前回の提起を踏まえ、更新制講習以後を見据えた研修改革へのその後の動き、さらに3月に文部科学省より4大学に指定された教師教育改革のための教員養成フラグシップ大学の構想を視野に入れながら、実践の場である学校と大学・研修機関を結び、教師の「主体的・対話的で深い学び」の持続的な展開を支える組織的な取り組みのための、より具体的な構想と組織的な実践へと問いを進めていくこととしたい。

## 話題提供 (実践的提案)

大阪教育大学大学院連合教職実践研究科主任・教授	峯 明秀
福井県小浜市立小浜第二中学校長	加福 秀樹
福井大学大学院連合教職開発研究科長・教授	柳沢 昌一
独立行政法人 教職員支援機構理事長	荒瀬 克己

## コメント

文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 教員養成企画室長	小畑 康生
--------------------------------	-------

## コーディネーター

福井大学 理事(企画戦略担当)・副学長	松木 健一
福井大学大学院連合教職開発研究科 准教授	遠藤 貴広 (敬称略)

# 6/18 (sat) 14:30-17:40 (zoom 接続開始 14:00)

学校・教育・地域を考える5つのアプローチ **ポスターセッションは 13:00-**

## Zone A 学校(対面・オンラインのハイブリッド開催)

### 21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

—多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探る—

**Zone A** は、これまで「21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」というテーマを掲げて、学校や園が持続・発展していくための授業改革・教師協働の在り方について考えてきました。加えて、多様な背景や困り感を持つ子どもも含めたすべての子どもが、あるがままの存在として生き、育つことのできる教育の在り方についても議論を積み重ねてきました。そこでは、子どもがあるがままの自分を出しにくい学校の状況があり、また教師も「主体的・対話的で深い学び」を実現することが難しいなどの悩みが共有されてきました。このような状況を踏まえつつ、教師間、子ども間、教師と子ども間の学習コミュニティの学びを深めていくためには、対話や協働の在り方をもう一度見つめ直すことが重要である点を参加者とともに共有してきました。これらの視点は、教育・保育を考える上で極めて重要だと言えます。前回 **2022 Spring Sessions** では、子どもたちとのくらしや授業の中での「探究」の在り方や、学習を支えていく過程での教師の変容に焦点を当てて議論してきました。

そこで、実践研究福井ラウンドテーブル **2022 Summer Sessions** では、一人ひとりの子どもが個性や能力を発揮し、学び合い育ち合う学校を実現するために教職員が協働していく組織をいかに構築していくのかについて、そこでの苦労なども含めて参加者のみなさまと共に協働探究し、対話や協働の質をいかに高めていくのかを検討したいと思います。

**Connection** 14:00-14:30 オンライン接続

**Orientation** 14:30-14:40 オリエンテーション (対面会場 ※決定次第お知らせします)

**Session I** 14:40-16:00 「多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校づくり」

#### Symposiums

#### <シンポジウム>

#### <シンポジスト>

14:40-15:00	軽井沢風越学園	教諭	片岡 利充
15:00-15:20	福井大学連合教職大学院教授(前至民中学校校長)		小林 真由美

探究的な学習プロセスの中で、相互作用を通して子どもたちが学び合っていくストーリー、それを支える先生たちの組織・コミュニティについて話題提供を踏まえて考えていきます。

<b>全体討議</b>	15:20-16:00	<指定討論>	
		福井大学連合教職大学院	藤岡 徹
		<コーディネーター>	
		福井大学連合教職大学院	宮下 正史

<休憩> 16:00-16:20

**Session II** 16:20-17:40 Breakout Room

**Cross-session** **Session I** の議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。校種等をクロスした小グループ形式での対話を編み込み、実践をデザインし、展望を生み出します。

**現状の共有と明日への展望**

## Zone B 教師教育(オンライン開催)

### 働き方改革と学び合う学校づくり

#### ー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー

今日の学校教育には、これからの変化の激しい時代において持続可能な社会の担い手となる子どもたちの資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの実現など、教育の質的転換・向上が求められています。教員が互恵的に学び合い高め合う組織づくりも必要とされるなど、学校は大きな変革の中にあります。更に、自治体、学校、地域、大学をつないだ広いコミュニティの中での教師の学び直しも求められています。他方で、教員のウェルビーイングにつながる働き方改革が喫緊の課題でもあります。

Zone B「教師教育」では、現状を克服し、教育の質的向上と働き方改革との両立を目指して、自治体における具体的な事例なども踏まえながら、行事の精選や教員の会議の削減などにとどまらず、働き方改革を実現しつつ教育の質的向上を図るためのカリキュラム・マネジメントや自律的な校内研修の在り方について展望を拓いていきます。

Society5.0 という社会を見据えて、学校という組織の新しい在り方を探り、協働する組織、学び合う組織としての学校づくりが求められています。今回の Zone B では、ICT を活用した学校内外における協働研究に取り組む教師の実践や、先進的に改革に取り組んでいる学校の変化など、多様な実践を共有し共に考えていきたいと思えます。多くの皆さまの参加をお待ちしております。

なお、今回もオンライン会議システム（Zoom）を用いて実施します。

<b>Connection</b>	14:00-14:30	接続	
<b>Orientation</b>	14:30-14:40	ガイダンス	
<b>Session I</b>	14:40-16:40	<b>Symposium</b>	
	<話題提供>	福井県教育総合研究所長	北川 裕之
	<実践報告>	福井県坂井市立加戸小学校教務主任	渡辺 邦彦
		滋賀県高島市立安曇川中学校研究主任	堤 祥晃
		福井県立武生東高等学校長	入羽 弘之
	<インタビュアー>	福井大学連合教職大学院教授	清川 亨
		福井大学教育学部助教	小林 溪太
	<進行>	福井大学附属義務教育学校長	
		福井大学連合教職大学院教授	牧田 秀昭

(敬称略)

自律的に学び続ける教師集団の校内研修の在り方について展望を拓いていきます。

#### **Session II** 16:50-17:40 Forums

実践報告を踏まえ、参加者それぞれが今後の実践にどのように生かすことができるか、小グループで協議します。

## Zone C コミュニティ(オンライン開催)

### 持続可能なコミュニティをコーディネートする

—つどい、つながり、新しい価値をつむぐ—

Zone C では、持続可能なコミュニティをコーディネートするというテーマで、地域の学習活動を支える公民館主事の方、地域の活性化に取り組む地域の方、そして地域と協働しながら教育活動を展開する教育関係者の方などが集いながら、シンポジウム等で対話を通じ、長く探究を続けてきました。

前回までの話し合いのなかで、高齢化、過疎、少子化、地域の担い手不足など現代社会の様々な課題に対し、既存の方法では地域で起きている深刻な問題の解決に結びつかないという現実に向き合い、新たなアプローチを模索することの必要性を確認してきました。また、私たちはコロナ禍において、持続可能なコミュニティをコーディネートすることの大切さや困難さに改めて直面してきました。そうした状況のなかで、若者や外部の視点を取り入れ地域を活性化させていこうという動きが前回報告され、新たな光も見えてきました。

例えば、学校現場においては、地域における課題解決に向けて児童・生徒が主体的に活動をし、学校と地域が一体となって展開する取り組みも進められています。また、人口が減少している地区に異なる視点を持った人たちが入り、その人たちをとりまくネットワークや取り組みが、地域において新たな価値や営みを生み出しつつあります。地域をなんとか活性化したいという願いをもちつつ、自分たちが楽しみながら主体的に活動することで、新たな渦を巻き起こしつつあります。

Zone C では、今回もこうした実践者自身が楽しみながらも、地域を活性化する取り組みをされている方々にご報告をいただきたいと考えております。私たち自身が、こうした取り組みを共有し、つどい、つながり、新たな価値をつむいでいくことを通して、いかに持続可能なコミュニティをコーディネートすることが出来るのか、それぞれの活動も振り返りながら対話を楽しみつつ探っていきたいと思っております。

14:00-14:30 接続

14:30-14:40 主旨説明

14:40-16:05 Session I 「島しょへき地校からの挑戦状」

話題提供：石井謙次 氏（八丈町立大賀郷中学校長）

コーディネーター：大橋巖・半原芳子（福井大学連合教職大学院）

14:40-15:15 実践報告と質疑応答

15:15-15:45 小グループでの話し合い

15:45-15:55 休憩

15:55-16:05 全体共有

16:05-17:15 Session II 「頼る力と頼られる力」

話題提供：七島貴幸 氏（FutureLab 大人代表）

コーディネーター：永谷彰啓・水野幸郎（福井大学連合教職大学院）

16:05-16:40 実践報告と質疑応答

16:40-17:05 小グループでの話し合い

17:05-17:15 休憩

17:15-17:40 全体セッション—振り返りと展望—

全体ファシリテーター：富永良史（福井大学連合教職大学院）

※時間は目安です

# Zone D International (online)

## International Initiatives on Collaborative Learning: Teacher Education Reform through Lesson Study

The Fukui Roundtable is held bi-annually in February and June. The Roundtable consists of five zones (A, B, C, D, and E). Zone D International provides a platform for collaborative learning on practices and future prospects for teacher education reform inside and outside Japan.

Since 2021, as part of its global development, the University of Fukui has been focusing on the Nalikule College of Education and its demonstration school in the Republic of Malawi and following the process of their reflective lesson study. In June 2021, Nalikule College of Education shared their initiatives and collaborative learning through lesson study in their own context in Zone D. We realized how crucial it is to work on it from a long-term perspective through practice and reflection. Therefore, we continuously follow the progress of their reflective lesson study practice.

This Zone will consist of two sessions; a symposium and a “Roundtable”. In the symposium, the symposiasts will discuss the approaches, results, and challenges of lesson study both at Nalikule College of Education and its demonstration school in Malawi, and Bukit Jalil Sports School in Malaysia. In the “Roundtable”, educators from other countries will share their lesson study practice and learn from each other in small group discussions. We hope that the various examples will stimulate you to reflect upon your practices. These sessions will be conducted in English and translated to Japanese.

Zone D では、実践における協働的な学びのプラットフォームを提供し、国内外の教員養成の展望を拓くことを目的としています。2021年からは、福井大学が行っているマラウイ共和国のナリクレ教員養成大学及び附属高校との協働・連携して実施しています。今回も引き続き、現地の授業研究のアプローチや成果、課題について報告してもらい、世界各国の教育関係者と実践や学びを共有し、捉え直しを行います。この Zone での事例紹介と議論を通して、参加者自身の実践と省察が深まることを期待しています。

なお、本セッションは英語での議論となりますが、日-英の通訳を行いますので、ご希望の方は、申し込みの際に通訳希望としていただき、当日は通訳用のZoomに接続するためのデバイスを**別途**ご用意ください。

**Connection** 14:30-15:00 接続/Connection

**Session I** 15:00-16:00 **Symposiums**

15:00-15:10 Lesson Study in Nalikule College of Education and its Demonstration School

15:10-15:40 Improving the quality of education through lesson study

15:40-16:10 Q & A, and comment

<Symposiasts> Mr. Kondwani Daniel Vwalika, Nalikule College of Education

Ms. Santiya Parthippen, Bukit Jalil Sports School in Malaysia

<Coordinator> Ms. Yasmine Mostafa, University of Fukui

<Commentator> Mr. Kobayashi Kazuo, University of Fukui

16:10-16:20 Break

**Session II** 16:20-18:00 **Roundtable** Sharing and learning from each other's practices in small group.

16:20-16:50 Practice Sharing from presenter 1

16:50-17:10 Group Discussion

17:10-17:40 Practice Sharing from presenter 2

17:40-18:00 Group Discussion

The following guest speakers are placed in each group.

Ms. Marwa Abdelzaher Sakran & Mr. Amr Ahmed El-Saied Ewida from Egypt

Mr. Chhoem Sosakkona from Cambodia

Ms. Likupha Burtone Lovemore from Malawi

Mr. Alshammari Mohammad Mashi from Saudi Arabia

Mr. Mthombeni Victor Siphon from South Africa

Mr. Makafu Rogers from Uganda

**Closing** 18:00- Mr. Teraoka Hideo

**Remarks**

# Zone E 探究(たんきゅう)(対面・オンラインのハイブリッド開催)

## 学(まな)びと教(おし)えのあたらしいすがたカタチをみんなで考(かんが)える

### ー学校新設(がっこうしんせつ)!? プロジェクトをはじめようー

Zone E 探究(たんきゅう)ではこれまで、「学(まな)びと教(おし)えの新(あた)らしいすがたカタチ(ニューノーマル)」をテーマにして、子(こ)どもたち・若者(わかもの)たちと大人(おとな)たちが世代(せだい)を超(こ)えて探究(たんきゅう)してきています。

今回(こんかい)のラウンドテーブルでは「プロジェクトをはじめよう」を合言葉(あいことば)にして、(1)子(こ)どもたち・若者(わかもの)たちの遊(あそ)び・学(まな)び・探究(たんきゅう)プロジェクトのポスター & プレゼンテーション・ラウンド、(2)トピック & ワークショップ「新設学校(しんせつがっこう)を創(つく)ろう PART 2」(枠(わく)をはずすワーク)をおこないます。

遊(あそ)び・学(まな)び・探究(たんきゅう)・プロジェクトのけいけんをわかち合(あ)い、みんなではっそうを跳(と)ばしましょう！

#### 1. 日程(にってい) 2022年(ねん)6月(がつ)18日(にち) (土(ど)ようび)

12:00-13:00 受付(うけつけ)

13:00-13:10 オープニング

13:10-14:10 ポスター & プレゼンテーション・ラウンド\*

14:30-17:40 トピック & ワークショップ「新設学校(しんせつがっこう)を創(つく)ろう PART 2」

#### 【進(すす)め方(かた)】

トピック 1 あたらしい環境(かんきょう)：市立札幌大通高校(いちりつさっぽろおどおりこうこう)

→ グループトーク

→ トピック 2 あたらしい決(き)まり：福井県立三国高等学校(ふくいけんりつみくにこう

とうがっこう) → グループトーク

→ トピック 3 あたらしいメンバー：Social Animal Bond → グループトーク

→ ワークショップ 新設学校(しんせつがっこう)を創(つく)ろう

#### 2. 会場(かいじょう) 対面(たいめん)：福井大学(ふくいだいがく)文京(ぶんきょう)キャンパス 総合研究棟 I (そうごうけんきゅうとう) 13階(かい) 大会議室(だいかいぎしつ)

オンライン：Zoom

☆ポスター & プレゼンテーション・ラウンドで、遊(あそ)びや学(まな)びや探究(たんきゅう)やプロジェクトを発表(はっぴょう)して下さる子(こ)どもたち・若者(わかもの)たちを(大人(おとな)たちも)募集(ほしゅう)しています。ご発表(はっぴょう)いただいた方には 福井大学大学院発行(ふくいだいがくだいがくいんはっこう)発表認定書(はっぴょうにんていしょ)をお贈(おく)りいたします。発表(はっぴょう)のエントリーは以下 URL・二次元(にじげん)バーコードの参加申込(さんかもうしこみ)フォームから願(ねが)いします。

<https://forms.gle/ZaXTiNrTdzFq5tLLA>



# 6/19 (sun) 8:20-14:00 (zoom 接続開始 7:50)

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

## Round Table Cross Sessions

【対面】		【オンライン】		ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。 実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたらと思います。 グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、この時間帯に、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。 報告Ⅲのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等は行いません。
		接続	7:50-8:20	
①はじめに	8:20-8:40	①はじめに	8:20-8:40	
②自己紹介	8:40-9:00	②自己紹介	8:40-9:00	
③報告Ⅰ	9:00-10:40	③報告Ⅰ	9:00-10:40	
④報告Ⅱ	10:40-11:40	④報告Ⅱ	10:40-11:40	
ランチ・ブレイク				
⑤報告Ⅲ	12:20-14:00	⑤報告Ⅲ	12:20-14:00	

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたくと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたくと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたらと思います。

## ラウンドテーブル

### 実践し省察するコミュニティを結び支える



2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を迫走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

#### 実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かせるような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする取り組みとして始まる。

#### 実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実はある。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の

展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

### 小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

### パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えはじめています。

(柳澤 昌一 『教職大学院ニューズレター』 No.11 2009.3.31)

### ラウンドテーブルの 4 重の意味

#### 4 Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。  
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。  
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice  
I, II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。  
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ  
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

## 実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2022.3

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして  
木岡一明・寺岡英男（この回は教師教育をめぐる20人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった）
- 2001.11.10-11 実践研究：福井ラウンドテーブル 省察的实践を支える協働（第1回）  
For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第1回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。（参加者20数名）京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第2回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志  
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る
- 2002.7.13-14 実践研究：福井ラウンドテーブル（省察的実践を生み出す 学び合う組織を編む）（第3回）
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル（第4回）  
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究：福井ラウンドテーブル（第5回）
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル（第6回） 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ：実践研究福井ラウンドテーブル2004（第7回）  
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる（於熱海～2009）  
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる（於早稲田大学）～現在に至る
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2005（第8回 参加者100名超）  
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル2005（第9回）
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2006 フェニックス・プラザ（第10回）  
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル2006（第11回）三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫  
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2007（第12回）渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹  
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル2007（第13回）藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008（第14回）横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル2008（第15回）人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2009（第16回）稲垣忠彦
- 2009.6.27-28 実践研究福井ラウンドテーブル2009（第17回）5つの領域：専門職として学び合うコミュニティ  
（分野ごとのセッション始まる）
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2010（第18回参加者300名前後）鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル2010（第19回）：学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2011（第20回 参加者300名を超える）門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル2011（第21回）松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
- 2012.3.3-4 実践研究福井ラウンドテーブル2012 spring sessions（第22回）（名称を変更する）

- 2012.6.23-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions (第23回) 参加者 450名を超える  
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions (第24回) 教師教育改革コラボレーションとの共催
- 2013.6.29-30 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions (第25回)  
11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013 winter sessions (明治大学)  
2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム (宇都宮大学) 1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 2014.3.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第26回) 参加者 550名を超える
- 2014.6.21-22 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions (第27回)  
11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)  
11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)  
2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム、 3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions (第28回) 参加者 700名を超える
- 2015.6.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions (第29回)  
11.21 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)  
11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 12.6 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)  
12.19 教育実践福島ラウンドテーブル、 2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム、  
2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2016.2.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions (第30回) 参加者 800名を超える  
生徒ポスターセッションを開催
- 2016.6.24-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions (第31回) 参加者総数 547名  
7.8 記念講演&シンポジウム (和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル)  
11.12 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)  
11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)  
2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015  
2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
- 2017.2.17-19 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions (第32回) 参加者 800名を超える  
特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催. 省察実践学会の発足
- 2017.6.23-25 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions (第33回) 参加者総数 566名  
10.14 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園)、 10.15-21 マラウイラウンドテーブル  
11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、 11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学  
12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 2018.2.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions (第34回) 参加者総数 627名
- 2018.6.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions (第35回) 参加者総数 476名  
10.20 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園)、 10.23 マラウイラウンドテーブル  
11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良  
12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学  
12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル (東京学芸大学)  
2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム
- 2019.2.15-17 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 spring sessions (第36回) 参加者総数 930名
- 2019.6.21-23 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 summer sessions (第37回) 参加者総数 426名  
9.28-29 札幌ラウンドテーブル、 10.23 マラウイラウンドテーブル、

	11.16-17 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.9 教育実践研究フォーラム in 奈良、
	12.15 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
	2.8-9 宇都宮大学教育実践フォーラム
2020.2.15-16	実践研究福井ラウンドテーブル 2020 spring sessions (第 38 回) 参加者総数 800 名程度
	3.3-4 ウガンダラウンドテーブル
2020.6.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2020 summer sessions (第 39 回) 参加者総数 500 名程度
	11.21 東京サテライトラウンドテーブル
	11.21 関西ラウンドテーブル
2021.2.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2021 spring sessions (第 40 回) 参加者総数 550 名程度
2021.6.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2021 summer sessions (第 41 回) 参加者総数 560 名程度
	11.13 東京サテライトラウンドテーブル
	11.21 協働探究ラウンドテーブル奈良 2021
2022.2.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2022 spring sessions (第 42 回) 参加者総数 660 名程度

## 福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバル・コミュニティへの誘い らうんどうていぶるのひろがりとおほまりをとおして

福井大学連合教職大学院教授 木村優

新しいミレニアムが幕をあけたばかりの 2001 年 3 月、教師教育にかかわる 20 名程の実践者・研究者が福井に一堂に会し、互いの教育実践研究を交流し合う研究会が催されました。この研究会のテーマは「教師の実践的力量形成をめざして」でした。このテーマのもとで解き放たれた熱い議論が、現在、福井大学連合教職大学院が毎年 2 月と 6 月に開催している実践研究福井ラウンドテーブルを生み出しました。

あれから十数年間、福井大学連合教職大学院は福井県内外と国内外の学校や教育機関との交流・往還を積み重ねてきました。そして、21 世紀の教育の実現に向けた学校と教師の挑戦を支援すべく、実践研究福井ラウンドテーブルを大黒柱にして実践コミュニティ<sup>1</sup>を耕し続けてきました。

実践研究福井ラウンドテーブルでは会を重ねるごとに、参加者の実践報告が多様な色彩を帯びています。ラウンドテーブルの創成期には数人の教師たちによる実践報告に限られていました。しかし現在では、教師の教育実践の報告や学校改革の挑戦過程から、教育研究者による学校との協働研究、医療・福祉における省察的实践への挑戦、学生・院生の大学(院)におけるプロジェクト学習の展開、地域の人々による学校・家庭の教育支援、海外学校で

の新しい教育実践への挑戦、そして、小中高生による自らの学びの軌跡についての報告に至るまで、多彩な実践が毎回のラウンドテーブルで交流されているのです。

この間、教育研究の飛躍的な前進を足がかりとしながら、「教育の質保証」と「学びの転換」を目指したさまざまな施策が矢継ぎ早に打たれるようになりました。アクティブ・ラーニング、チームとしての学校、コンピテンシー・ベース、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び等々といった新しい改革用語が流布するように、学校と教師、そして子どもたちには実に多くの変化が求められています。これらの求めは、超スマート時代(Society5.0)、超 AI 時代、VUCA<sup>2</sup> ワールド等と呼ばれる新しい時代における、あらゆる個人とすべての社会の幸福を実現するための、私たち人類の挑戦の現れと言えるでしょう。

このような変化の激しい時代の教育改革期では、学校、教師、子どもたちの豊かな学びと確かな育ちをサポートする機構が必要になります。学校も教師も子どもも、それぞれが孤立するのではなく、つながり合い、支え合い、協働することで変化に向けた挑戦が可能になるのです。そこで、福井大学連合教

職大学院は現在、21世紀のあらゆる実践者、研究者、そして子どもたちの挑戦を支え促すための省察的機構<sup>3</sup>としての実践コミュニティとして成熟を遂げようとしています。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの、文字通り「実践の省察」を支え促すことを最重要のビジョンとして描きます。このビジョンを基盤とした実践研究福井ラウンドテーブルでは、そこに参加する日本全国・世界各地の実践者や研究者は当然、それぞれ福井大学連合教職大学院とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属していて、それぞれのコミュニティの中で変化を生み出す新たな実践に挑戦しています。つまり、実践研究福井ラウンドテーブルは、イノバティブ（革新的）なローカル・コミュニティが集合する大きなコミュニティの「垣塙（るつぼ）」なのです。

もしも、このコミュニティの中で数多くあるローカル・コミュニティがイノバティブな実践をベースにして結びつき、そこでコミュニティ間のネットワークが広がり、協働が加速すると、いったい何が起きるのでしょうか。それはおそらく、誰も見たことのない新しい知の創造であり、新しいかかわりの現れです。この新しい「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、広がるほど、現代社会を取り巻く困難や未来社会に予測される問題を突破するいくつかの「ソリューション（解）」が生み出される可能性が高まります。ただし、「知」と「かかわり」のダイナミクスを大きくし、それらのイノベーションの質と価値を深めるためには、「戦略」が必要になります。ただ指を咥えて待っているだけでは、ダイナミクスやイノベーションは起こらないのです。

福井大学連合教職大学院では、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルの展開で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携して、分散型コミュニティのデザインに着手し始めました。もしも、複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで、「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そして、そこで互いの課題や問題を見つけ出し、それらの解決策を考え出して共有可能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え合い励まし合うことが可能になると考えたためです。

すなわち、日本全国・世界各地にあるローカル・

コミュニティを結びつけて、各コミュニティの相互作用による変化を生み出すために、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことができる分散型のコミュニティ構造をデザインしていくのです。福井大学連合教職大学院の分散型コミュニティへの挑戦とはつまり、現代社会と未来社会に生きるすべての人々の学びと育ちを支える、教育改革のグローバル・コミュニティを築く戦略なのです。

2014年度から、福井大学連合教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島でラウンドテーブルが開かれるようになりました。その後、ラウンドテーブルは奈良や長野でも産声をあげ、各地の学校の校内研修にも広がっていきます。2017年度には福井大学連合教職大学院と JICA との連携を基盤として、アフリカのマラウイでラウンドテーブルが始まりました。日本各地そして世界のラウンドテーブルで引き出されはじめた教師たちの教育への熱誠、子どもたちの学びへの希望、そしてすべての人々の幸福への追求が、新たな省察的機構としての実践コミュニティを各地に創発していくことになることでしょう。

福井大学連合教職大学院ではこれまでも現在も、私たちのコミュニティ、そして分散型のグローバル・コミュニティに参加くださるあなた（ピア）を求めています。ぜひ、私たちとのかかわりを通して、そして実践研究福井ラウンドテーブルを通して、21世紀を革新する教育のあり方についてともに考え、すべての人々が幸福を追求できる未来社会をともに築いていく、この挑戦に多様多層に同行いただけると幸いに思います。

1 あるテーマについての関心や熱意等を共有して、それぞれが所属する分野・領域の知識や技能を相互に持続的に交流し、深めていく集団や組織のこと（ウェンガー・マクダーモット・スナイダー, 2002）。

2 現代社会の特徴を表す 4 つの言葉：Volatility（不安定）、Uncertainty（不確実）、Complexity（複雑）、Ambiguity（曖昧）の頭文字をとった造語。

3 コミュニティの組織学習を支え、コミュニティのメンバーの実践の省察を励ます組織＝機構のこと（ショーン, 2017）。

# Archive

—アーカイブ—

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Summer Sessions と、ラウンドテーブル 2018 Spring Sessions に参加していただいた方の報告を、Newsletter No.89 (16.10.15) と No. 110 (18.04.21) からご紹介いたします。

[Newsletter No.110 \(18.04.21\) より](#)

## ラウンドテーブルでの学び(聞く・語る)

越前市南中山公民館 主事 辻岡 秀美

越前市には、小学校区 17 地区に公民館が配置されています。同じく、地域づくりの自治振興会という組織も、17 地区にあります。人づくりと街づくり、線引きが難しい中で、誰もが足を運んでくれる敷居の低い公民館を目標に、いろいろな取り組みをしています。なかでも当館は、児童館が併設されているという利点を最大限活かした【放課後子ども教室】で、いろいろな事にチャレンジしています。本の日(月 2 回、図書館司書による読み聞かせ)、茶道教室(月 1 回、地元自主講座講師が兼任)、ジュニアウクレレ(月 1 回、地元自主講座生が兼任)。長期の休み中は、県のサイエンス事業や環境アドバイザー事業の利用、料理教室、そうめん流し等々。また、“地区の子どもは地区で育てる”という、地域の方々の力強い後押しのもとで開催できる合宿通学は、家庭でも学校でも、多分見る事ができない子どもたちの一面を見て取れる、とても貴重な時間を与えてもらっていると、感じています。

どの事業にもつきものである産みの苦しみと、育ての悩みが、とてもちっぽけな事に思えるほど、履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」の 2 年間の受講と、計 4 回参加させていただきましたラウンドテーブルが、私にとっては、貴重な体験となりました。住んでいる所も違えば、職種もさまざま。自分より年配の方々に、若い学生さん。4 回ともにメンバーに恵まれ、気持ちの持ち方次第で、方向性が変えられること。良い意味での開き直りかた、息抜きのしかた。一歩下がること＝あきらめではないこと。

自分は、狭い視野でしか判断できなかったことを、幾度となく反省させられました。

異文化交流は、話合いの中からヒントを得て、立ち上げた事業(教室)です。

道徳の授業材料に苦慮されている若い先生のお話をお聞きして、家庭教育が基本ではあるけれども、時間をかけて作られる授業があつてこそ、いつもトイレのスリッパを並べてくれるような、子どもの姿があるのだなと、感じました。

ある学生さんに、成人式で、何十年ぶりに公民館へ足を運んだけれども、自分の頭の中に公民館はないと言われ、青年層の課題をここでも感じました。南中山の始めたばかりの青年学級は、いつかそこに花が咲くことを願って、地道に細く長く育てていこうと、改めて思いました。

平成 30 年 3 月、受講が無事終了しました。私の場合、主事になり 3 年目、市の担当課からの業務命令で、否応なしに受講させられたという感の中での始まりでした。が、「記録を取る、残す大切さ」は、時間を追うごとに身体にしみついてきました。

地区の方々とのかなげない雑談の中で、ふと疑問に思ったことなど、何気なく書き留めておいたものが、後になって言わんとすることが理解できたり、突っ走りそうになる自分を、落ち着かせることができたり、失敗の繰り返しを防いでくれたり等々、一呼吸間を取る余裕が持てるようになりました。

越前市の主事は異動がつきものです。この 2 年間の学びと出会いを糧に、これからもその地区その地区での人づくりの、縁の下の力持ちでありたいと、思っています。

最後になりましたが、柳澤先生、半原先生、ありがとうございました。このご縁を深く感謝いたします。

## Zone D ラウンドテーブルを通して、教師としての生き方を探究し続ける

敦賀市立松陵中学校 山田 晃大

福井大学教職大学院を修了し、現場の教員となり、1年が経った。初めての学校の文化に慣れられなかった1学期前半、6月に参加したラウンドテーブルは、私にとって、教員生活のスタートラインを捉え直す機会となった。生徒たちの様々な活躍が見られる部活動での指導に意欲を燃やした1学期後半、やっと日々の業務に慣れてきた2学期前半、生徒と共に歩み直せた2学期後半、こうして1年間を振り返り、「新たな夢のゴールに向かっていくのだ」と歩み捉え直せた3学期、私の教員生活1年目はこのように過ぎていった。

2月に開かれたラウンドテーブルを振り返る。1日目、Zone D 前半の「シンポジウム」では、フィリピンとマラウイ、若狭高校といった国内外の先生方が授業改革についての発表をした。それぞれの発表から、国や文化が違っても目指している方向性は同じであると感じた。『主体的、対話的で深い学び』によって『資質能力の三要素』をバランスよく育てていく」このための教育改革が今、世界的に行われているのだ。

後半の「フォーラム」では、信州大学附属松本中学校(以下、松本中)や福井大学教育学部附属義務教育学校(以下、福大附属)の「授業研究の展開」について発表をお聞きし、それらをもとに参加者の方々と語り合うことができた。

松本中の発表内容は、生徒たちが主体的に進めてきた総合的な学習の時間についてであった。松本中学校には昨年度の10月に、訪問させていただいた経験がある。ちょうど、このNews LetterのNo.91にてそのときの学びは記録されている。私が訪問したときに、中学3年生が行っていた取り組みを、当時の1年生が引き継ぎ、今に至る。今回の発表は、その取り組みが、まるで筋書きのないドラマのように展開していった、その歩みについてであった。

福大附属の発表内容は、9年間の義務教育をダイナミックに再構築していく挑戦が、今どのように進んでいるのかについてであった。「関係を探り構造をつかむ」。これは、中学校数学科の「核となる学び」として、義務教育学校になる前の附属中学校が掲げていた言葉である。数学でこそ経験できる学びが端的に表されており、教職大学院在学時の私は、すごくこの言葉が好きだった。義務教育学校となった現在、数学科が掲げている言葉は「何気ない疑問を数学を通して考え、解決していく能力を育てます」だ。

これまでの実践を踏まえ、義務教育9年間を見通すために、再構成されたこの言葉は、まるでこれからの数学教育の道標のようである。

これらの発表を聞いた先生方は、それぞれの取り組みの魅力について、各々の経験をもとに、話をしてくださった。中でも印象的だったのは、東京都板橋区立赤塚第二中学校からいらっしゃっていた先生のお話であった。校舎を従来型の校舎から今の教科センター方式のものに改築した際、大切にしていたのは、教員の意識改革であったという。松本中の発表はある意味、総合的な学習の時間を通して、先生と生徒の意識改革についてのお話であり、福大附属の発表はある意味、義務教育学校となった今、教師の意識改革がどのように進んでいるのかということについてのお話であったと言える。このように、「フォーラム」におけるグループセッションは、その場の学びを、各々の経験をもとに、語り合いを通して捉え直すものとなった。

ラウンドテーブル2日目の報告では、私自身の教師としての歩みを、語り合いを通して跡付けることができた。「数学の面白さ」を生徒と共に追究していた教職大学院時代の取り組みは、現在の授業実践の足場となっている。在学時、様々な資料をもとにして、知識基盤社会で求められる能力を試す、「大学生版PISA作り」に挑戦した経験は、2月初めに行った道徳の授業実践のための教材研究に生かされた。日々の業務でなまってしまうがちな、広い視野でのものの見方が、この2日間をへて、呼び覚まされた。また今回のラウンドテーブルでは、1日目の「フォーラム」と2日目の両方で、ファシリテーターを勤めさせていただけた。メンバーの経験や考えを推し量りながら、語り合いを通して、それを言葉にし合っていけるよう、努めた。今年の4月からは2年目となり、職場での後輩もできるだろう。担任を持つ可能性も高い。今回の経験は、必ず4月からの自分に生かされると確信している。

ラウンドテーブルを終えて今思う。実践研究 福井ラウンドテーブルをきっかけにして、自らの実践者としての歩みを捉え直し続けることができている。6月のラウンドテーブルでは、動き出している1年の歩みを捉え直すことができた。2月のラウンドテーブルではそれを振り返り、今後を展望できた。この様に私は、ラウンドテーブルを通して、教師としての生き方を探究し続けることができている。「学び

続ける教師」として、生徒たちの未来のための教育  
をデザインしていけるよう、これからも努めていき  
たい。

## 子供を真ん中において語る

永平寺町志比南小学校 加藤 儀直

「Aちゃん、今日は絶好調やわー」「なんで、こう考えるかがわからんのやけど」。同僚の養護教諭と長い時には30分以上、子供のことについて職員室で語り合うのが私の日課である。お互いの観ていることや感じたことを語っていると、管理職や事務職らも一緒になって一人の子供のことについて語り合う。コーヒーを片手に、椅子を寄せ合って自然に広がっていく輪は、どこの学校でも観られるような光景である。

### 【児童/生徒を中心に】

報告のあった事例は、福井で学んだ授業研究を自分の国に持ち帰り導入を試みようとするものであった。しかし、報告の中でも指摘があったように生徒主体の学びを創り出そうとするとき、先生方の不安が多くあったと言う。そのような中でも一度実践をし、授業後に検討会を持つと、多くの先生方が生徒主体の学びの意義を感じ取っていた。日本での事例は、伊那小学校の事例などが報告された。ここでも、子供の姿を同僚と語り合い実践を進めていくことの報告がされた。

しかし、最終日のセッションでは子供の姿を当たり前前に語り合うことができないという報告があった。インターンという立場で実習に取り組んでいるAさんは、「教師と子供の関わり方」に重点をおいて日々の実践に取り組んでいる。2017年4月からの実習は楽しいことばかりだけではなく、「つらい」「しんどい」と感じることもあったと言う。詳しくは、Newsletter No. 107 や現在執筆中である長期インターンシップ報告書を検討していただきたい。Aさんの場合は、大学院生という立場であり、毎週定期的

にカンファレンスをして自らの実践を省察する「場」があったので、実践してきたことを捉え直し新たな視点を得ることができていた。しかし、メンター教員とのカンファレンスは大学でやっているようにはいかず、悩むことが多かったようだ。

### 【いろんな見取りがあることで、深い理解になる】

最終日のセッションでは偶然ではあったが、学校のしんどい現実と日々向き合ってきた経験のあるメンバーが集まった。子供たちにとって、学校は何かを学ぶ場である以前に「安心・安全な場」でなければならないことが、グループの中で共有された。そのためには、「若手」「ベテラン」関係なく、一人一人が見取った子供の姿を語り合い、たくさんの視点から捉えていくことがとても重要になる。本来なら、日常的に子供の姿を語り合っているはずだが、Aさんのように悩んでしまうケースもあるので改めて子供の姿を語り合うことの必要性を感じた。

### 【ゆるやかなつながりの中で】

授業だけでなく日常の子供の姿、係の仕事をしているときの子供の姿。子供たちが見せる姿は、その時々で大きく違う。もしかすると、私の知らないところではいつも見せない姿を見せているかもしれない。おそらく、最終日のセッションでAさんが報告したことの多くは、子供がいつもはみせない姿を伝え、語り合うことをしていきかけたのだろう。高いアンテナを張るだけではなく、一人一人のことについていつでも語り合うことのできる「ゆるやかな協働関係」がある実践コミュニティをいつも意識しておきたい。

## ラウンドテーブルに参加して

高浜町保育実践研究グループ ぴっか

昨年度に引き続き、ラウンドテーブルに参加させていただきました。前回、参加した時には、学校関係の方や、教育に携わる行政の方の割合が多く、「参

加して良かった」という手ごたえを得たと同時に、心細さも残り、幼児教育の立場からの参加が増え、子どもたちの学びや、育ちについて語り合えるコミ

ユニティがもっと広がってほしいと感じました。しかし、今回は幼稚園、保育所、認定こども園などの参加も多く、幼児教育を語り、傾聴していただける機会が増え、大変嬉しく思いました。また、様々な職種の方の実践報告を聞くことで日頃は味わえないような刺激を受け、有意義な時間を過ごすことができました。

昨年度は Zone A でシンポジストとして保育実践を報告しましたが、今回はポスターセッションで参加しました。ポスターの制作は今回が初めてで、どうすれば伝わるのか、本当に伝えたいことは何なのか、など、たくさん悩み、推敲してなんとか完成させました。研究してきた内容を可視化することで、実践の中で何に重きを置いてきたかが明確になりました。そして、ポスターを用いて参加者に実践内容を伝えることは、発表者の表現力や説明力を高めることになり、ポスターセッションに馴染みのない私たちにとっては難しさもありました。しかし、一生懸命取り組むことで、発信することの本質に少し触れられたように思います。また、参加者からの質疑を通して、考え直すことや、追求すべきことに気付き、より学びが深まりました。

シンポジウムでは Zone D に参加し、日本に限定されず海外の授業研究についても知ることができました。初めは、学校教育がテーマの中心で、やはり保育士の私たちは、場違いなのではないかと心配していましたが、参加してみると海外と日本においても、学校教育と幼児教育においても、共通した取

り組みや、課題があることに気づき、次第に話に引き込まれていきました。例えば、研究授業を実施し日頃の教育を省察し改善していくことは、保育所で実施している公開保育や意見交流会に匹敵すると感じました。学校でも保育所でも、子どもを取り巻く環境や密な職員連携が重要で、それを高めていくために日々葛藤する姿が共通すると感じ、私たちの取り組みにも自信を持ってました。

フォーラム後の小グループでの交流は、様々な立場の方が集まり、「保幼小の実践に学び合う」というテーマの下、お互いの実践を語り合いました。様々な立場からの参加ゆえに、まずは自分の所属している場を知ってもらうところから始まり、それぞれの現状を赤裸々に明かしていくこととなりました。同じ職種が集えば、「分かっていること」「掘り下げべきではないこと」と勝手に思い込み、流れてしまうような事柄が、ここでは丁寧に話され、自分では気づけなかった新たな発見に出会うことができました。その発見の内容ももちろんのことですが、ここでの、立場に関係なく認め合いながら話を進めていく感覚が新鮮で、とても心地良かったです。

今回のラウンドテーブルでは、報告者としても、聞き手側としても、刺激的な1日でした。ラウンドテーブルに参加するたびに学びがあり、私たちの力となっていく実感があります。保育者として成長していくために学び、挑戦し続ける姿勢を大切にしたいと思います。

## Newsletter No.89 (16.10.15) より

### 省察する同志

#### 長崎大学教職大学院1年 猪子 夏菜子

わたしは、多くの悩みと課題を抱えていま、教職大学院に来ています。この福井の「実践し省察するコミュニティ」に初めて参加させていただき、強い衝撃を受けました。現場では淡々と日々の業務に追われ、ただ毎日の教育を繰り返していただけでしたが、福井で様々な方々と出会い、日々新たな教育に挑戦されている実践をお聞きし、胸が熱くなりました。学校現場の学級で教育を行う際は、一人の孤独な戦いだと思っていました。ですが、実はそうではなく、自分が戦っている間にも、全国各地に同志がいる、同じように子どもたちを思い、そのときその

ときを精一杯に生きているということがわかりました。

今回は、Zone A (学校) に参加しました。「子供たちのコミュニティを支える教師のコミュニティ〜チームで「育ち」を支える〜」ということで、まさにこれからの教育は、チームで活動することが必要なのだわかりました。一人では孤独です。限界があります。そして、壊れやすい…。同志を見つけるとに省察していくことで、様々な新たな価値が生まれます。壊れそうなきには、同志との絆が自分を救ってくれます。そして「育つ」ことができます。子

どもの「育ち」と共に、私たち教師も「育つ」必要があり、そして学校にも新しい「育ち」が求められています。そのことについて出会ったメンバーと共に考えました。

シンポジストのお話では、地域との連携や、スクールリーダーについて、さらには具体的な総合学習の実践を聞くことで、学校の「チーム」としてのあり方について学びました。その話から考えたことは、「何かを変えようと思ったら、まずは動くこと、しかも小さなコミュニティから」ということです。これまで、「一教師の自分が何をしても学校は変わらない」との認識でしたが、そうではないと思えるようになりました。「小さな波がいずれ海岸に打ち寄せるように、波は少しずつ周りに広がり、どこへでも伝わっていく」その波が必要であり、自分はその一部になれるのではないかという可能性を感じられるようになりました。

シンポジウムでの話題提供を受けて、グループでの交流を行いました。その中で感銘をうけたのが、森田先生（中学校）の実践についてです。わたしの勤務校では、見せるための校内研修になってしまっており、枠にとらわれすぎて教師が意欲的に活動できていないという現状があります。森田先生の学校では、そうではなく、飾らない校内研修になっており、その実践が教師自身のためになり、すぐ子どもに返せるものでありました。定期的に教師同士の話し合いの場を設定し、小さなグループで思ったことを言える雰囲気を作られているとのこと、研究のテーマを縛りすぎず、そのときの子どもの実態により

自由に内容を決められること、指導案がメインではなく、話し合いを重視し、略案で授業を行うということ、1年間のまとめとして、それぞれ自由な形でA4レポートを作成し、綴るということ（指導案でも感想でも良い）でした。また、チーム作りの手立てとして定期的にもみんなでスポーツをしたり、お茶をしたりする時間を作っているとのことでした。わたしの勤務校の校内研修は、形に縛られすぎて、どちらかというやらされている感が強いように思います。もっと教師自身が、主体的に取り組める校内研修ができればいいなと思います。そのためには、学校がよい「チーム」になり、教師同士がつながる必要があると考えます。

最後に、今回の福井ラウンドテーブルに参加して思うことは、学校もそうですが、自分自身が変わることを恐れてはいけないということです。変化には、批判や中傷はつきものです。それをマイナスととらえるのではなく、むしろよりよいものに変化する前の、助走であり必要なものであるというプラスのイメージでとらえることが大切だと思えるようになりました。自分の正直な気持ちを話し実践を聞いていただくことで、自分が認められたといううれしさが込み上がってきました。涙が出そうになりました。どの方も、それぞれの人生を懸命に歩まれていることを知り、もがいているのは自分一人ではないとわかりました。この学びを心に刻み、いまこのときから、新たな歩みをはじめていきたいです。

## もの・ひと・こと…そこに込められた思いが見えるようになることへの期待

福井大学教職大学院 宮下 哲

### 0 はじめに

実践研究福井ラウンドテーブル 2016 Summer Session(6/24-26)の Zone C2 では、福井市越廼地区や長野県上田市の実践などをもとに、「地域と学校はいかに学び合うのか—大人も子どもも育ちあうコミュニティへ—」について問い進めました。それぞれの実践内容や会場からの声はどれも示唆に富むものばかりでしたが、異なる実践でありながら「大人と子どもがともどもに育ち合う豊かな実践のプロセスが語られる」ときに共通して聞こえてきた言葉があったことが印象的です。ここでは、その言葉をも

とに、当日紹介された実践を振り返り、テーマに関わって私が考えたことの一部を記したいと思います。

### 1 「人や物やこと背景にある『思い』が見えてくることで、私の立ち位置が見えてくる」

越廼小学校の川崎先生は、越廼地区の魅力を探求する実践を報告されました。実践の過程で、川崎先生と子どもたちが意識を向けたのは、地域の魅力を支え自分たちの日常の様々な活動に「手を貸してくれる」地域の人々の思いでした。例えば、越前水仙という地域の魅力は、水仙そのものの力だけでなく、そこに関わる「あのおじさん」「あの中学生」の存在に気付き、その人々の思いであることを把握して

いきます。子どもたちは、「地域の魅力」という抽象的で感覚的な事柄の背景に、顔と名前のある人の存在と思いを把握すると、ますます越前水仙やそれに関わる人を大切な存在と認め、自分もその思いをもつ者として活動に参加・参画しようと動き始めるというのです。おそらく、この頃の子どもたちは、地域の人を「手を貸してくれる」人ではなく、「ともに大切なものを守る」人と思っていたのではないかと思います。

同様のことは、上田市教育委員会の伴さんによる「荒れていた学校が地域の人のかかわりによって転回して行った報告」の中にもありました。生徒が、学校の美化に「手を貸してくれる」地域の人と顔と名前や思いを知り、「あのおばさん」「このおじさん」が大切な存在になっていく頃には、学校の荒れが下火になっていったのです。生徒会活動の時間に、生徒と地域の人が、共に美化活動の計画を立て汗を流して整備するなど、地域の人と生徒が協働で活動することが日常的になるにつれ、地域の人が生徒を支えたとともに、生徒の成長が地域の人を元気づけるなど、大人と子どもが共どもに育ち合っていたのです。

## 2 「この活動の Fixer は自分たちだと、多くの人が言うようになっていく」

この言葉は、報告を聞いた参加者が、ご自身の体験も踏まえて話してくれた感想にあったものです。

「人が見え、実践が見え、その思いが見えるようになると、『人と人との関係が見えるようになるので、その関係の中に自分がどのように立てばいいのかが見えてくる』『実践と実践との関係が見えるようになる』、次に自分がどのように実践するといいかが見えてくる』というのです。実践に参加する人の多くがそのような経験を重ねると、あの実践は私のも

の、この実践はあなたのものと線引きすることの意味が薄くなり、むしろ人と人、実践と実践をつないで新たな関係や学びを展開する喜びを生み出すことが主眼になっていくという予感も込められた言葉のように思います。越廼公民館の実践では、公民館主事や地域の人々の動きや思いが見えるようになっていくにつれ、地域の人が「ここはわたしがやるよ」「こんなことをしたらどうだい」と動き出したことが報告されていました。見えやすくなった関係性や思いを足場にして、みんながつなぎ役になって主体的に動くことが、活動の持続性を支えているように思います。

## 3 「見えなくなると、すぐに元に戻ってしまう」(まともに代えて)

ところで、伴さんからの報告では、人や活動や思いなどが地域の人からも生徒からも見えにくい状態になると、生徒や教師が「地域の人には学校の手伝いをしてくれて当たり前」と思ったり、地域の人が「学校は地域の人間を無料で奉仕する支援員と思っている」と活動の意義を疑問視したりするなど、すぐに協働実践の主体者という認識は薄くなるもありました。具体的な個人の実践とその思いを、見えやすくしたり実感的にとらえやすくしたりすることが大切であることは示唆されましたが、実はこれを創造し、維持するための知見は、霧の中で霞んで見えていると思います。霞の中ではあるものの、確かに存在し光っているその知見を、私たちがもう少し確かに把握するためには、一つ一つの実践の中で、実践に関わる人々の行為とその時々思考や判断を、もう少し丁寧に捉えることが必要なのかもしれない。その探究を進める同志が、全国にこんなにもたくさんいるという実感を励みに、私の歩みを進めたいと思います。

## 生徒ポスターセッションから学んだこと ～ 語ることの意味、語ることを通して～

福井市安居中学校 高松 由紀子

ラウンドテーブルの生徒ポスターセッションに、今年も本校生徒が2グループ参加させていただいた。一般のポスターセッションに混じり、安居中や附属中の生徒が参加したのが発端となり、現在行われているような児童・生徒だけの発表の場が設けられたと伺っている。私自身、2年前の冬のラウンドテー

ブルに、生徒の様子を軽い気持ちで見に来たところ、安居中の良さや活動を自分の言葉で生き生きと語る姿に、我が校の生徒ながら衝撃を受けたのを覚えている。と同時に、ふと心の中に一つの疑問がよぎった。「安居中の生徒は、なぜ自分の言葉で語れるのだろうか・・・」

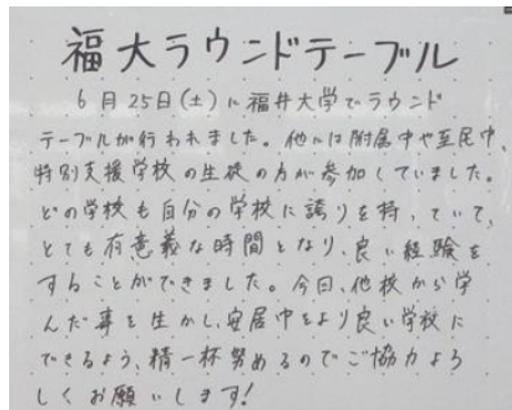
その素地をつくったのは、紛れもなくこれまでの安居中の生徒や先生方だ。先輩後輩の垣根が低いという関係性をうまく生かし、自由な雰囲気で見聞を言い合いながら生徒会活動そのものも行われてきた。今回のポスターセッションも、3年生が2年生をリードしたり支えたりするのはもちろん、みんなの意見を尊重することを最も大切にして準備することができた。さらに、今までの反省を生かし、単なる学校紹介をするのではなく、現在の生徒会活動やそれに対する自分たちの思いや課題を中心に話を組み立てようということになった。だから、前回より内から湧いてきた言葉を大事にして語ることはできたのではないかと思う。

生徒の姿を通して、ポスターセッション発表がゴール（目的）ではないということも再確認できた。そこに行き着くまでのたわいもない話し合いややりとりを繰り返す中で、自然と自分たちがたどってきた歩みや取組が省察され、安居中が大切にしたいことが明らかにされていく。その営みがあったからこそ、生徒が本当に価値があると思ったことや実感していることを自分の言葉に載せることができた。そして、他の学校の発表にも真剣に耳を傾け、臆することなく質問できたのだと思う。

ポスターセッションに参加した生徒は、翌月曜日には、生徒会の掲示板に次のような文章を書き、全校生徒に向けて発信していた。その言葉の中には、他校の発表から学んだこと、自分の学校をより良いものにしていこうという決意等が綴られていた。発表や他校の生徒との交流で生まれた熱い気持ちを冷

めないうちに文章化することで、より強いメッセージとして伝わってきた。

生徒の姿から、安居中を支えてきた学びやこれからも大切にしたいことが垣間見えた気がした。語ることでしか、真意は伝わらないこと（覚えていることをただ発表するだけでは、言葉に魂がこもらないと生徒も言っていた）。語ることは考えること（自分の学校について考え、議論を重ねたから語れるようになる）。語る力をつけるには、良い聞き手になることも必要であること等々。発表の中心となった3年生が入学した2年前は、語ることは程遠い姿で、原稿がないと話せないどころか、人前に出ることそのものに強い抵抗感を示す生徒が多かった。しかし、安居中で学ぶことにより、時間をかけて少しずつ育まれていき、今回の姿になっていったのだと思う。語ることを通して、生徒のそして学校そのものの可能性がもっと広がっていくのをおぼろげながら感じている。それが何であるのか明らかにできるようにしていきたい。



※ご所属は当時のものです。

# 教職大学院の学びを振り返って

2021 年度修了生の“声”が届きました。ラウンドテーブルは教職大学院の院生にとって大きな学びの場の一つになっています。

## 教職大学院で学んで

カリタス幼稚園 西川 くるみ

新しい園舎で迎えた新年度、春休みにバタバタと引っ越しをして、慣れ親しんだ園舎との別れで心にぽっかり穴が開いたようで、修了したばかりだというのに教職大学院で学んでいたことが遠い昔のように感じられます。そんな中でニュースレターへ寄稿する機会をいただき、あの充実した時を思い出すことができました。

カリタス学園では福井大学連合教職大学院と提携して、各校種から学びに来ています。今年も幼稚園、小学校、中高からそれぞれ修了生が教職大学院を巣立ち、学園の「学力育成構想委員会」のメンバーに加わりました。子どもの育ちを一貫して見通しながら、校種を越えて協働していく委員会です。昨年度カリタス学園は60周年を迎えたのですが、実は40周年から全教職員が一堂に会しての学園研修会が始まり、毎年行われております。学園研修では校種や職種を越えた教職員同志が「語りと傾聴」(共有ビジョン・チーム学習・メンタルモデル)をしながら省察することで、学園の教育理念(共有ビジョン)と自己の生き方(自己マスタリー)を擦り合わせていきます。M2の夏期集中講座では難解な『学習する組織』を読みましたが、学園研修をとおしてそれぞれの働きに敬意を抱き、つながりを感じて明日からの歩みを進めていくことで、まさにシステム思考を体験していたのです。学園全体が学習する組織であろうとする中で、教員として働きながら自己マスタリーを磨いてきたことが解き明かされたような気持ちになりました。

カリタス幼稚園から教職大学院で学んだのは私が3人目で、私が入学した時には2人の先輩によって幼稚園改革はもうすでに始まっておりました。既存のコミュニティのリズムを大切にしながら、共感性をもって開いていくことで、草の根からじわじわと、

そしていつの間にか風通しの良い同僚性が育まれていたのです。私は大学院での学びをとおして幼稚園改革の歩みを俯瞰してみることができ、さらに追い風に助けられるように同僚を巻き込み、また支えられながら歩んでいます。大学院でラウンドテーブルを体験して、私は園内でもラウンドテーブルをすることを提案し、2人の先輩も「いいね、いいね」と賛同してくれて、あっという間に開催してみる運びとなりました。自分たちの紀要に書いた実践報告をもとに語り、聴き手は質問と感想を用意して臨んだ初めてのラウンドテーブルでは、どのグループも盛り上がっていたようでした。そしてその後も“新園舎での園生活のビジョン”や“学園の使命継承”など、様々な場面でワールドカフェ方式で話すことが多くなり、どんなことでも言ってみて良いという安心感のもと、教員同士がどんどん開かれていきました。

大学院では毎月のレポートに、何を書こうかと悩んだことも懐かしく思い出されます。とにかく感じたことや考えたことを言語化して少しずつ残していた軌跡が、いつの間にか長期実践報告にまとめるまでになりました。怒涛のような2年間を過ごして、修了式にあたる再出発のカンファレンスを前に、ふと気が付くと「ひとりひとりが主人公であるために～それぞれが主体性を発揮して」という私の長期実践報告が、カトリックのミッションスクールであるカリタス学園の教育理念を真正面からタイトルにしてしまっていたことに驚きました。

今後は大学院で出会った仲間と情報交換したり時には励まし合ったりしながら、同僚と一緒に学びあい、深く省察し、子どもの気づきのその先を見通した保育を実践する力をみんなを高めていきたいと思っています。それぞれの場で、真摯に向き合い、新しい

風を起こしている先生方がいらっしゃるということが、どんなに励みになることでしょうか。2年間の学びを支えてくださった教職大学院の先生方、院生の

みなさまにあらためて感謝いたします。そして、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

## “再出発”に込められた2年間の学びとこれから

高浜町立認定こども園 cocokara 岡山 佳耶

令和4年3月23日、私は最後のカンファレンスを迎えました。このカンファレンスは再出発のカンファレンスと呼ばれ、1年の中で最も大切なカンファレンスなのだそうです。最も大切であるその理由は、出発ではなく“再出発”という言葉を選んで位置づけられているところにあると私は捉えています。再出発という言葉が辞書で引くと、「新たな意気込みで、もう一度とりかかること」と書いてありました。それはまさに、大学院での学びとこれからの自分を示しているような言葉だと思いました。大学院を修了したからと言って何か特別に変わるわけではなく、実践を続けていくことに違いはありません。しかし、大学院で考えたこと、感じたことが私の保育観や価値観を揺るがし、向き合うことで学びが深まって、保育に対する眼差しに変化を与えてくれたのは確かです。そしてそれが、これからの実践に繋がると思うと、どこか新しい気持ちで保育を捉えることができます。その状況が“再出発”という言葉に重なると感じ、新たな決意を示す場、葛藤を振り返って語る場として、この日を最も大切と呼ぶことに納得できます。

さらに振り返ってみると、最後のカンファレンスだけでなく、2年間の中には小さな再出発の瞬間がたくさんあったように思います。

例えば、様々な文献や資料を読み、先生方と対話を重ね、新しい気付きに出会い、前向きな気持ちになって動き始めようするとき、それをミクロな視点で捉えると再出発と表現することができるのかもしれませんが、特に校種や立場を超えた先生方との対話は、小さな再出発を支えてくれたように思います。大学院に入るまでの私は、幼児教育という世界の中だけで実践を捉え、学びに繋がようとしていました。それも大切なことですが、大学院では校種や立場を超えた先生方が、幼児教育を大切に捉えて熱く語ってくださったり、時には「幼児教育はなぜ環境を通して行われるのか？」というような原点に迫る素朴な問いを投げかけてくださったりして、今までにない角度から本質に迫り、より深く学べている

と感ずることがありました。「多様さが本質に導く」といったところでしょうか。この多様さの中で認め合い、学ぶことはとても心地がよく、私の小さな再出発の原動力になっていたように感じます。

また、今まで記してきたこと以外にも、小さな再出発と言える状態がもう一つあったように思います。それは、自分の実践を振り返るために立ち止まり、そこで考えたことを次の実践に活かそうと、また動き出す状態のことです。これはまさに再出発です。この2年間は学びに向かって歩き続けているように思えて、実は立ち止まっていた時間がたくさんあったように感じます。忙しさや、失敗を認めたくない弱さから、今までは流れっぱなしになっていた自分の実践とじっくり向き合い、そこに課題を探ったり、意味を見出したりすることを保育者になって初めて実行したように思います。この作業は苦しく、自身に嫌気がさしてしまう瞬間も多かったのですが、次への決意を固めたり、自分の思いを再確認したりすることに繋がり、実は自信になっていた部分もあったように感じます。立ち止まる時間が、自分を強くして、さらに前へ進むことを助けていたのかもしれない。

このように、私は出会いや、立ち止まるということを通して、その中に何度も再出発の瞬間を迎え、学びを深め、今日まで歩んできました。そして大きな再出発の地点＝大学院修了という日を迎えたのです。最後のグループセッションでは、学びの標として書き上げた長期実践報告書にまだモヤモヤした部分が残っていること、これからは自分は学び続けられるのか心配なこと、こんな私だけれど幼児教育がさらに好きになったことなど、再出発を迎えた自身の正直な思いを語り、同じように他の院生さんの語りも聴きました。そして、互いにエールを送り合い、温かな雰囲気の中、再出発のカンファレンスは幕を閉じたのでした。

大学院修了と言う一つの大きな節目を迎えた私。令和4年4月1日より、大学院在籍期間中に勤めていた福井大学教育学部附属幼稚園から異動を経て、

福井県の最南端にある高浜町の認定こども園に勤めることになりました。保育所から認定こども園に変わった新設園で、園名は「cocokara」と言います。偶然ではありますが、私の再出発の場にふさわしい名前で、縁を感じてなりません。大学院での学びを

経て、私の新たな保育者人生が、ここから始まります。

最後に、これまで学びを支えてくださった大学院の先生方、院生さん、出会ってくださった全てのみなさんに感謝の気持ちをお伝えし、2年間の振り返りを終えたいと思います。ありがとうございました。

## 探究的な学びが創り上げる未来

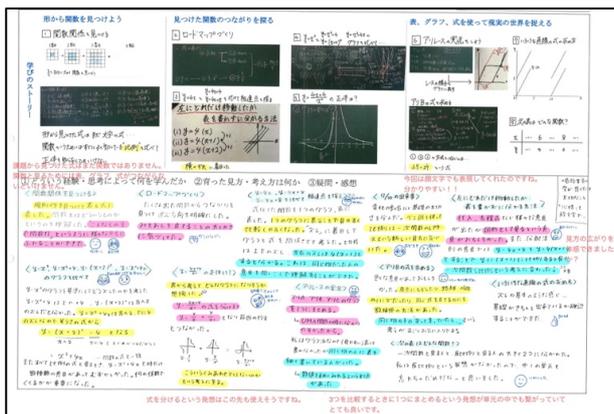
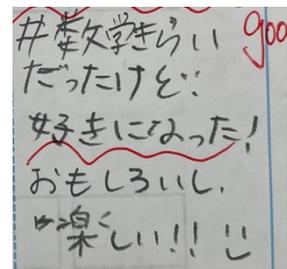
永平寺町立永平寺中学校 三上 泰生

オンラインでの学位記伝達式を終え、教職大学院生として最後のカンファレンスとなったこの日、頭の中に浮かぶのはやはり「探究」と「評価」という言葉だった。振り返るとこの2年間、常に「探究」と「評価」について考えていた。所属していた福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程では、教科担任を受け持つことになった子どもたちとどのような探究的な学びを紡ぎ、ストーリーを創り上げていくか、その学びのストーリーをどう評価していくのかという2つの挑戦を絶えず行ってきた。探究的な学びの授業実践は、先人の先生が積み上げてきた実践から、私なりの解釈を加えて模倣すること（省察的模倣）を続け、時には目の前の子どもたちが抱く学びの発意に寄り添った新たな授業実践を開発してきた。探究的な学びの評価実践では、「省察シート」という子どもたちと共に創り上げてきた学びのストーリーをそれぞれの子どもが振り返り、文章や絵で表現する実践に挑戦してきた。省察シートをどのように評価していくかについては、令和2年度まで数学科に在籍されていた柳本一休先生（現鯖江鳥羽小学校教頭）と対話を繰り返しながら、「探究」「コミュニティ」「学びの価値」という3つの項目を柱として主観的ではあるが評価を行ってきた。これらの挑戦を続けてきた1つの理由は使命感であった。私は

中学校時代、福井市至民中学校で70分授業という先進的なカリキュラムの中で学校生活を送り、牧田秀昭先生や大橋巖先生の探究的な授業を受け、学問の本質や学ぶことの楽しさを見出すことができた。だからこそ、探究的な学びが生まれる授業を受け、教師になった自分たち（現至民中学校：畑中良太教諭）が「探究」と「評価」の実践にある課題に挑戦しないわけにはいかなかったのである。

しかし、「探究」と「評価」の実践をいくら私が挑戦し続けていても、教育界には広まっていけない。だからこそ、学校を越え校種や教科の隔たりなく対話することができる教職大学院のカンファレンスやラウンドテーブルが実践の発信場所となり、私の実践をブラッシュアップしてくれたのである。例えば、省察シートの構成はA3用紙の上段に教師が撮り溜めた板書やホワイトボードの写真が時系列に並べられているが、ストーリーの中にある探究的な学びの深淺は子どもたちそれぞれである。そのため、子どもによって上段にくる写真の種類やサイズが異なってくるのが想定されるのではないかということは教職大学院のカンファレンスやラウンドテーブルでの発信を繰り返してきたからこそ見えてきた課題であった。

対話の中で発見した課題を乗り越えていくための挑戦が、新天地の永平寺中学校で始まっている。授業のオリエンテーションで、「授業の中で、はっ！とした瞬間を撮りためていくこと」を指示すると、早速2時間目のグループワークでパシャッとiPadで写真を撮る音が聞こえてきた。しかも入学したての1年生の授業である。この行為を繰り返し続けることで、写真フォルダには子どもたちオリジナルの学び



のストーリーが生み出されるはずである。授業の中で、はっ！とした体験はドリル的な学習よりも断然子どもたちの心に残り続ける。この写真フォルダをもとにして、子どもたちが自身の学びを深く省察できるようにしていきたい。

子どもたちと共に創り上げる探究的な授業は、「附属だからできる」という言葉を何度も聞いてきた。しかし、附属や公立関係なく子どもたちは探究的な学びの持つ魅力に気づき、それを求めている。

これは永平寺中学校のある子どものつぶやきである。「数学が嫌いだけど楽しい」「数学が苦手でも好き」のようなつぶやきは学びに向かう力の高まりが表現されている。この学びに向かう力の高まりを確かな学力につなげていくことができれば、この挑戦はどんどんと広がっていくだろう。今の子どもたちはこれから私たちと共に未来を創り上げていく仲間である。教職大学院で学んだことを生かし、公立中学校でも未来志向の教育を目指して子どもたちと共に授業を創り上げていく。

## 教職大学院の2年間を振り返って—自分の「型」を捉えなおす—

関西大学中・高等部 宮崎 亮太

2000年代はじめの就職氷河期に社会・地歴公民科の教師をめざした私にとって、「協働」することは難しいことであった。というのも、当時は公立、私学ともに社会・地歴公民科は教員になるハードルがあまりに高く、専任に就いて教師として安定的に仕事をしていくためには、周りにかまっている余裕は全くなく、知識や技術を習得することが最優先であったからである。とにかく周囲から求められたことをこなしていくために、一人で背負い込むことがあまりに多かった。そのため、誰かとともに何かをするなら、一人でこなした方が早いと考える癖がついてしまった。

職場ではタスクに追われ、仕事が「作業」と化し、少子化のなかで教員として生き残っていくために、学校への市場原理の導入、キャリア教育、AL型学習など、その時々世間において流行した教育ワードやメソッドに目うつりしながら、自分の教育の「型」を追い求めてきた。ただ、どこかで違和感を感じていた。なぜ違和感を感じるかについて、ふりかえることはこれまでほとんどなかった。

2019年に自分のなかでの「求められる教師」と「なりたい教師」との相剋から悩みを深め、これまでの教師としての自分の歩みを整理して、棚卸しをする機会が欲しいと考えるようになり、2020年4月に教職大学院に入学した。しかし、COVID-19の感染拡大の状況下になっていたこともあるが、教職大学院は自分が想像していたものと違った。カンファレンスやラウンドテーブルなどオンラインでおこなわれた。職場においては一斉休校期間を経験し、これまで意識していなかった当たり前の日常が失われ、これまでの自分の教師としての歩みを整理するつもりが、

現在進行形で起こっているCOVID-19の感染拡大の状況下における教育について、考え、対話する機会が多くなった。ところがかえって、改めてこれまでの教員としてのあり方、学校とは何か、教育とは何かを捉えなおす時間ときっかけを与えられたように思われる。

教職大学院での仲間や書籍を介した先哲との対話のなかで考え、言葉を得て、自分で語り、書くことを通して、教員としての歩みをふりかえるなかで多くの気づきが得られた。そのなかで、一人で悩み、教育活動に取り組んできたと思っていた日々は、実は多くの人びとに支えられていることに気がついた（教職大学院生や修士生の書き記したのものや話には頻出のフレーズであるが、私自身は長期実践研究報告書を書くまで、多くの人に支えられているという本当の意味をよく理解できていなかった）。

自分を支えてくれている人には、同僚や教職大学院の先生、仲間など以外に、現在周りにはいないが重要な存在がいる。それが私にとっては高校時代と大学時代の恩師である。二人の恩師については、非常に豊かな時間を過ごしたことは記憶しているが、教師としての自分にどのような影響を与えているか、これまで掘り下げて考えてみたことはなかった。長期実践研究報告書を書くなかで、教師としての「構え」は二人の恩師から学んだことが基礎になっていることに気がつかされた。

二人の恩師に共通している点は、対話する多くの時間を持ったことである。恩師は新しい教育理論やメソッドを意識されていたわけではない。ただ、恩師からは問いを持つきっかけ、それを考えるヒントが与えられ、対話しながら学んでいったということ

である。単に教授者と学習者という関係で結ばれていたのではなく、人として尊重され、人として向き合ってくれたからこそ、学問の知識のみならず、人としてのあり方を学ぼうとしていた。

私が求めてきた「型」にどこか違和感を感じていたのは、教育に効率性を求めてしまい、教育メソッドや理論をはめ込み、それらを教育に用いることで大きな効果が得られるという幻想を抱いていたからではないか。私は学生時代から能を学んだ経験から、「型」は絶対的なものであり、疑う余地はないと思っている。教師には絶対的な「型」はないが、どこかで「教育とはかくあるべき」という枠組みを求めていた。枠組みから外れる生徒は必ず出てくるが、そうした生徒について、外れたという現象面にのみ着目してしまい、自分の教師としての力量の無さに残念な気持ちを抱き、なぜ懸命に向き合おうとしているのうまくいかないのかと体も心も疲れきってしまうこともあった。

しかし、学校は機械ではなく人間が集うところである。同じことをやってもうまくいく時とうまくいかない時があり、反応も日々違うわけである。ある場面のみを捉えて考えるのではなく、もっと長いスパンで捉える必要がある。それも狭い視点ではなく巨視的な捉え方をしなければならぬと思った。そうすると、現象の背景や影響などを構造的に理解しようとするようになり、一つひとつの事象にのみ囚

われることがなくなっていったように思う。同時に、教師として日々の実践を積み重ね、歩みを進めていくなかで、心細く不安に感じることもなくなっていった。これまで「失敗」と思ってきたことが、実は失敗ではなく、むしろ転機となるきっかけであることがわかってきたからである。

人間どうしが集まれば、立て板に水のようにうまくはいかない。もっと複雑で猥雑で、騒々しくて、ごちゃごちゃしているはずである。言葉の力を信じて、何度も捉え直し続けてみるのが、どのようなメソッド、理論よりも大切であることが、教職大学院の二年間で気づけたことである。

これまでの教師としての歩みを振り返るにあたり、私にとっては教師生活の一コマに過ぎない、生徒との何気ない会話や同僚との仕事なども、私が教員として今ここにあるためには何一つ欠けてはならない、重要な意味を持つべきごとであることがわかった。それは教職大学院において、意味づけ、価値づけするための言葉を得ることができ、実践の概念が大きく広がったことが背景となっている。

今年度は数年ぶりに高校1年の担任を受け持っている。折に触れて教職大学院のカンファレンスなどで必死にメモしたノートを見返しながら、新たな実践を積み重ねる日々を送っている。

2年間、ありがとうございました。

## 省察することは自分を見つめ、受けとめること、そして歩み寄ること

坂井市立東十郷小学校 石川 裕子

教職大学院を修了して1ヶ月が過ぎた。年末から必死に報告書を書き、担当の先生のご協力でも何とか出来上がった。書いていたら、これまでの自分を振り返って涙が出てきた。つらかったのではない、とても自分を愛おしく感じたからである。決して私はナルシストではない。どちらかといえば、自分へのコンプレックスが強く、すぐに自分を否定することから始まる。あれができない、これができない、そんなことを言い続けながら時間を過ごしてきた。

私ができることには限りがあることは、もちろんわかっているが、特別支援教育コーディネーター専門研修から自分が学びたい、何とかしたいとの思いをもち、必死に前に進んできた。うまくいったことばかりではない。自分が進めたい方向を同僚たちに受け入れてもらえずにどうすればよいのか悩みつ

方向を修正しつつ、それでも何とかしようとしてきた時間が私にとってはとても愛おしく感じたのである。一人で歩んできたわけではない。カンファレンスで話を聞いてくださった先生方や院生の皆様、同僚たち、たくさんの方のおかげで自分が前に進んでいることを、書いて振り返ることで感じたのだ。

30年以上教員として子どもに関わってきた。うまくいかないことがあると、自分ではなく相手を理由にしてきたように思う。その結果、当然物事は良い方向には進まなくなる。自分の気持ちを伝えることはもちろん必要である。しかし、相手の気持ちを考えることも、もちろん必要である。振り返れば当然のことなのだが、これまで自分の価値観を最優先にして、相手が自分に寄り添うことを要求していたような気がする。

実は、一番変えやすいのは自分である。この二年間でやっとそこにたどりついた。自分が我慢をして相手に従うのではない。まずは一步相手に歩み寄るのである。具体的に言えば、これまで自分がとってきた当たり前から、何ができるかを考えてその子にとって必要な配慮をするのだ。たった一步から、相手は何歩も歩み寄ってくれるのを感じた。そうだったのか、こうすればよかったのか、そう感じたことが何度もあった。

令和2年度に、「愛着障害」について学んだ。和歌山大学の米澤先生の研究に触れ、研修会にも参加することができた。自分がこれまで良いと思って進めてきた対応が、実はより事態を悪化させていたこともわかった。子どもの状態を把握し、その子にあった対応をしていくことが必要だと考え、令和3年度には実践した。毎日のように書いていた記録を読み返してみると、その子や保護者の変化が感じられた。そこには、特別支援教育ゼミで学んだ「子どもの行動には理由がある」「子どもの出している信号を受けとめる」が大きな影響を与えていたことは間違いな

い。特別支援学級を担任したこともない、特別支援学校にいったこともない私だが、実は普通学級に在籍する子どもたちにとって、その子に必要な特別な支援があるのだと教えていただいた。

できないことを自覚させるのではなく、できるようになったことを共に喜び、できるようになりたい気持ちに寄り添うことができるようになっていきたいと強く思うことができた。「ミドルリーダー養成コース」と聞いたときに、「私が入っていいんですか」と聞き返してしまったことを思い出す。しかし今考えると、このコースだからこそ自分が見付けたいものに向かって進めたのだと思う。コロナ禍でたくさんの制限があった二年間だが、積極的に対面授業に参加して自分が見付けてきたことをこれから実践し伝えていきたいと思う。

私を変えてくださった教職大学院の先生方、院生のみなさま、そして私と一緒に歩んでくれた同僚たちや子どもたち、保護者のみなさまに感謝するばかりである。とても楽しく大切な時間だったと感じている。

## 『2年間』が私にくれたもの

福井市立木田小学校 川崎 太地

本稿を書いている今、福井大学連合教職大学院を修了して、早2ヶ月が経とうとしている。現場に出てみると、インターンシップとは比べ物にならないほどの忙しさで、また、そのことに驚く間もなく、あっという間に時が過ぎている。そんな日々を少し忘れ、大学院生活最後のカンファレンスとなった再出発のカンファレンスについて振り返りたい。そして、自身のこれまでの旅路とこれから歩もうとする道の再確認、さらには他の修了生や在籍生、スタッフの方々と共に教職大学院での学びについて再考する時間としたい。

再出発のカンファレンスの中で大学院での学びとして私が語ったことは大きく2つである。1つ目は、私の長期実践研究報告「旅する教師 ～『共に創る』悩みと成長～」(以後、長期とする)にも書いたことであるが、自身の授業観の大きな転換についてである。授業参観をメインとするインターンシップにおいて、それまで教師を中心として物事を考えていた私は、当時の校長先生との出会いや英語科だけにとどまらない様々な教科における『共に創る』授業実践の参観を通して、子どもを中心にして物事を見た

り考えたりすることの大切さを痛感した。多くの先生方は、「子ども主体」などといった言葉を用いて教育を語るが多いため、子どもを通して授業を見ることや子どもの学びの姿から授業を語る、はたまた子どもたち自身を信じるといったことも実践されている方が多いだろう。だが、当時の私にとっては度肝を抜かれるほどの衝撃であった。今現在も授業実践をする際には、子どもたちの言葉だけでなく、表情や仕草一つ一つを見極めながら授業を進めているが、その土台は教職大学院での2年間にある。さらには、私の大学院での学びは、子どもを中心とすることからすべてが始まったと言っても過言ではない。

2つ目は、長期には明記していない部分である。というのも、長期を書き終えた後に、私が無意識のうちに考えていた部分であることが分かったからである。長期には明記していないと言ったが、表現はされている。私の長期には、ことあるごとに「なぜ？」が登場する。これこそが、2つ目である。私がインターンシップを行っていた安居中学校では、教員同士の話し合いにおいても、教師の子どもたちへの働き

かけにおいても「なぜ？」が常につきまとっていた。方法論に走るのではなく、常に「目的のための手段」という考え方を学校として持っていたように思う。2年間の中で2人の学級メンターのもとで学んだが、その2人ともが「目的のための手段」という考え方を強く持っていた。もちろん、その背景には、「自分の言葉に責任を持つため(〇〇のためにこれをする、と自分の言葉で言うため)」という思惑もあったようだ。兎にも角にも、そういった考え方が染みついた環境で過ごす中で、私自身もいくつかの失敗を繰り返し、悩みながら、ようやく「なぜ？」を問いつづけられる人間になってきたと感じている。これは、2年間をかけて徐々に私の体に染みついたものであり、今の私の土台の一部を担っている。

ちなみに、1つ目の中で「多くの先生方は『子どもを主体』に考えて、子どもを通して授業を見ることや子どもの学びの姿から授業を語る」といったことを述べたが、なぜそのようなことをするのだろうか？おそらく、皆さんの中で今や当たり前の考え方となっているものだろうが、なぜそのような見方や考え方をする必要があるのであるのだろうか。世間がこういう考え方だから、だけではなく、その意味をじっくり考え、自分なりの答えを持って他者と語り合うことで、自分の言動の意味が見えてくるに違いない。ぜひ、皆さんの考え方を聞いてみたい。

## Reflection on learning at DPDT

Tjipto, William

Thanks to the encouragement of Wang-sensei and other teachers, I joined the DPDT program in 2020, right at the start of the COVID-19 pandemic. I didn't know how that would affect my studies and practice at the beginning, but luckily, we were able to continue the program online. Over the next two years, I've had many discussions with teachers from many backgrounds and experiences. Although I was considered a "Middle Leader" when I had joined the program, I felt like a newborn baby compared to some of these other veteran teachers with decades of experience. Could I really be sharing in the same breath as them?

I was surprised that I graduated, honestly.

It was not until very recently when I had some conversations with new students in the DPDT Program and some conversations with other ALTs (Assistant Language Teachers) and I came to a positive realization: I had really grown professionally and personally and I had changed much over the past two years.

When I first joined the DPDT Program, I only had 6 years of experience in the Japanese education system as an ALT, so it was as an assistant in most of the classes and not a true T1 primary teacher in the classroom. Yet, I discovered through the DPDT program that I had a lot to share and offer as well. With their encouragement, I talked and shared my unique perspective of not only being a foreigner and language learner new to the country,

but I expressed the difficulties and unique aspects of the job that an ALT faces. Every teacher I shared my discussions with during the program was supportive and many found my discussions interesting and engaging because my viewpoint and teaching methodology and focus cast a different light on their own practice, despite years of teaching. This was one aspect of the Community that I later wrote about; new teachers could share with veterans and even a relative outsider like myself had something to offer.

In this way, my first year went by quickly. Through these discussions and reading other practice records, I attempted new challenges and my efforts were recognized by other teachers in my schools. An important pillar throughout my time at DPDT and my practice has always been Communication. The need for Communication is important in an English class, after all, what is a language but the means to express oneself to another? But it is also the basis of sharing, learning from others, and teaching. I felt even early in my first year, I had taken huge strides. I eventually initiated an inter-junior high school project with the help and support of my fellow teachers.

Then in my second year, I started to take on more challenges. Up until this point, I realized I had relied heavily on the support of others, but it was during this second year I felt confident enough to collaborate with other teachers. Together, we helped to approach the new

English textbook with different methodologies and find new ways of engaging students in the classroom. I was given the opportunity to mentor other student teachers and teach lessons as more than just a typical ALT thanks largely to my principal and staff. These leaps would not have been possible if I had taken the first step into the program. At the end of those years, the program culminated in a long-term practice report detailing all my experiences up until that point.

My experiences henceforth will continue to be extremely important in my practice as I continue in my

teaching career. Although I continue to be an ALT this school year, my trials and successes of my years in DPDT have opened the door for me to keep educating and focus on improving my practice and the education of my students. I recognize now that I have gained knowledge, but I am also knowledgeable enough to know I have more to achieve. I welcome the challenge every day and know that I can keep finding new ways to improve in every lesson with every student.

Professional Capital  
Transforming Teaching in Every School

# 専門職としての 教師の資本

—21世紀を革新する教師・学校・教育政策の  
グランドデザイン

「専門職の資本」という観点から、教師や学校が  
いま直面する現状を取り上げ、教職の魅力を  
取り戻すために何ができるかを考える1冊。

アンディ・ハーグリーブス  
マイケル・フラン ..... ●著  
木村 優 篠原 岳司 秋田 喜代美 監訳

[ 主な内容 ]

- 第1章 資本というアイデア
- 第2章 教職への相反する二つの考え方
- 第3章 教職のステレオタイプ
- 第4章 「潜在能力」と「かかわり」に投資する
- 第5章 専門職の資本
- 第6章 専門職の文化とコミュニティ
- 第7章 変化を生み出すために歩みを進める



A5判 416頁  
5,500円(本体5,000円+税)

ご注文はこちらまで



**K 金子書房** 〒112-0012 東京都文京区大塚3-3-7  
TEL 03(3941)0111(代) FAX 03(3941)0163 URL <http://www.kanekoshobo.co.jp>